

『Fora』創刊に寄せて

井上逸兵

慶應義塾大学

慶應言語教育研究フォーラム主宰

『Fora』の創刊を心よりうれしく思う。

このジャーナルの発刊の意図は、主として大学院生や若手で、この世界でがんばっていかうという人たちに、少しでも書く機会を多くしようというものだ。もちろん研究の世界で生きていくものの多くは、同時に教育者であり、教壇に立ってしゃべることも仕事の一つである。むしろ、それで生計を立てていると言ってもいいだろう。

しかし、研究者である以上、一番大切なことは書くことだと思う（もちろん研究してその成果を書く）。むしろ、書いてなんぼ、の世界である。それがあつての教室や学会でのしゃべりだと思う。書く機会は最大限活用して書こう。

『Fora』発刊それ自体がそのようなメッセージでもある。英語圏には、Publish or Perish.ということばがある。書かないものは去れ、ということだ。

クオリティは高いに越したことはない。ただ、量を書いて質をだんだんに上げていくという考えがあつてよいと思う。『Fora』のフィロソフィーはそれである。みんなどんどん書いてほしいと思う。書くために生きる、くらいであつてほしい。

神経文字学で知られる、東京女子医科大学名誉教授岩田誠先生におもしろいことばを教わつた。ラテン語の諺に、Verba volant, scripta manent.というのがある。話し言葉は飛んでいくが、書いたものは残ってしまう、という意味である。元来は、古代ローマ人が、支配地に対して、約束は口約束だけにして書き残してはいけない、言質を取らせるな、と言う意味でこれを言ったのだが、岩田先生は、学会発表だけして論文化しない医局員に対して、この句を逆手にとって使っているのだそうだ。

さらにインターネット時代の現代では、書いたものが残ると言っても、かつてのように、図書館の片隅に埋もれるようなことがないことも頭におくべきだ

ろう。書いたものの多くが検索の網にかかり、どこかで誰かが読んでくれる可能性がある。これが、いまの書くことのさらなる意味である。

書こう。書いて書いて書きまろう。